

湯本遺跡

(ゆもといせき)



【所在】

鷹栖町 9 線西 2 号

【指定年度】

昭和 5 4 年

【標柱建立】

昭和 5 4 年

黒曜石の石器類が出土

明治 36 年、9 線西 2 号に湯本由太郎が入植し、田畑兼営農業を続けてから、すでに 4 代目を迎える。開拓当初、住居跡から黒曜石の石器類が出土したが、2 代目太吉は石器類の多くを拾い集め、保存していた。その数は定かではないが、研究家や北海道大学の調査団や学校などの教育機関に史料として提供していた。

戦前は好事家の小学校教師が収集するくらいで、大方はアイヌ民族の使用したものくらいしか知識がなかったのである。戦後、馬から耕運機となり、大型水田に改造したため、石器がよく出たところは跡形もなく耕され、出土地点を特定できないままになっているが、ナエ（南三号川）の右岸畑の中には今も時折、黒曜石を見かけることがあるという。

昭和 60～61 年の嵐山 2 遺跡調査から旧石器時代の石斧、矢鏃などが発見されたことから、ここらあたりも旧石器時代と関わりがあったと考えるべきであろう。

嵐山 2 遺跡と湯本遺跡は 500m しか離れていない。道埋蔵文化財センターの西田茂（発掘担当者）によれば「数千年の間、この付近に古代人が住んでいたもので、どこから遺物が出てても不思議ではない」という。

アイヌ民族は石器を利用しておらず、これ等の書物は縄文時代中期（今から 40～50 年位前）の嵐山遺跡と同世代のものと言われている。